

灼熱の夏の甲子園野球と 2020 年のオリンピック

2018 年度の全国高等学校野球選手権甲子園大会は、異常な暑さの中で行われました。国の指針では、「35 度以上であれば、屋外での運動は危険でありすべきではない」とされていますが、今年の甲子園では 37 度くらいの方が何度かありました。今後このような暑さが続けば、ベンチ内のクーラー設置や適宜の水分補給という対策があっても死亡事故の可能性も少なくはないように思います。実際、クーラーの設置されていない地方球場では多くの学生が熱中症で救急搬送されたとの報道がありました。

年間約 4000 名の交通事故死があっても、車のない社会などは考えられないので、この程度の数字なら国民はこの状況を受け入れます。国は死亡ゼロにはできないが、できるだけ下げようとの努力を行っています。同様に、甲子園大会についても、「死人がでたらどうする？」という感情論ではなく、中立的なデータを元にして国民的議論が必要であると思います。公開できる西宮消防局からのデータでは、この大会期間中の甲子園球場への救急車出動は 26 件で、そのうち熱中症と診断されたのは 9 名でした。しかし、自ら熱中症を最初に疑えば訪れる球場の救護室で、病院に行くべきと判断されたひとは救急車ではなくタクシーを使用しているということを考慮すると客観的に議論するためには、この救護室でデータの公開が必要です。

夏の全国高等学校野球選手権大会の開催時期をずらす、選抜大会と合わせて春に 1 回のみにする、北海道で開催する、大阪ドームで行うなどの案がでていますが、たぶん甲子園球場周辺のホテル、店などの既得権益の問題で、選手から死者が出ない限りなかなか変更はできないと思います。

また、2020 年には、この暑い夏に東京オリンピックが開催されます。ネットでのアンケート調査では医師の 50% に近い方が時期を遅らすことに賛成しています。国はサマータイムの導入を提案したごとく、選手の熱中症に対する危機感もっています。しかし、時期をずらすなどの提案はなされません。これは甲子園と同じく、放映権などの巨大な利権のため、死者がでる前には変更はできないのでしょう。NHK で東京オリンピックの開催時期に批判的な報道がないというのはとても悲しいことです。

2018.11.23